

巻頭言

読書についての雑感

電子制御工学科 橋爪 進

私は読書が嫌いではない。むしろ本を読み始めると止まらないことが多い。食事の時間になっても体を動かしてないから一食ぐらい抜いてもいいだろうと考えるほどである。だから趣味は読書と公言したいところであるが、実際のところ読むジャンルは偏っており、読書により教養を深めたり心を豊かにしたり視野を広げたりといった高尚な目的はなく、読書を単に楽しむだけで履歴書の趣味の欄に読書と書くことが憚られる体である。私にとって読書は一つの娯楽であり、読書に関して文系の先生方のような示唆に富む話はとてもできないし、ましては巻頭言に相応しい文も書けそうもない。ここでは読書について私の雑感を少し披露することでご容赦いただきたいと思う。

さて、私の読書の始めは小学校高学年からだろうか。もちろんそれまでも本は読んでいたが、どちらかという外で遊ぶ方が好きな普通の子供だった。読書量が増えたのは、小学校の図書館でコナン・ドイルのシャーロック・ホームズがきっかけではないかと思う。ホームズの明晰さや謎解きの面白さに触れ、推理小説の魅力を知った。小学生向けに易しく編集された本だと思うが、私を魅了するのに十分であった。中学校ではアガサ・クリスティーに嵌り、かなりの冊数があったがほとんど読破したと思う。なかでも「そして誰もいなくなった」はこんなプロットもあるのだとその独創性に感心した記憶がある。また、SF小説にもめり込んだ。ちょうど、宇宙戦艦ヤマトの劇場版やスターウォーズが公開された頃である。随分とハヤカワ文庫にお世話になった。その後、小松左京、筒井康隆、星新一、内田康夫など、現在は東野圭吾に嵌っている。彼は工学系大学出身だけに物語の中の研究・技術の設定が緻密で、工学者の立場から読んで共感できる部分が多い。

読書のメリットとして、教養の涵養、視野の拡大、想像力の錬成、ストレス解消、脳の活性化、読解力の向上、語彙の増大、などがあるらしい。ジャンルがSF・推理小説に偏っている私には前の二つの恩恵はあまりないが、想像力は大いに育まれたのではないかと思う。小説本は基本的に活字のみであり、登場人物、場所、環境など物語の舞台は作家が描写した文章から自分で創造しなければならない。その作業を苦痛だと思ったことはない。好きな作家の本は、自分で意識して舞台を作らなくても読み進めていくうち自然に舞台が頭の中で構築され、自分自身がその中に引き込まれて一緒に体現する感覚さえある。作家は物語の中の何気ない描写や会話からその舞台設定情報を読者に提供しており、作家の文章力には頭が下がる。私は論文で文章を書くがなかなか難しい。理工学系論文なので10人の読者がいれば10人とも同じ解釈をするように正確かつ簡潔に書かなければならないが、自分の文章が読者にどのような創造（解釈）をさせるかを想像しながら書いている。レポート等で学生の書いた文章を目にするが、何を言いたいかわからない場合が多い。学生の文章力の無さもさることながら、読者の立場になってどう考えるかを想像しながら書いて欲しいと思う。その力をつけるためには読書は最適だと考えるのだがどうだろうか。

歳のせい最近物忘れが酷くなった。以前読んだ本を再び読んでいてもこの先どんな展開だったか思い出せないことが多い。残念なことだが、一方で既読の本を真っ新な気持ちで読むことができることに気が付いた。幸いにも家には千冊を超える本が眠っている。退職したら毎日読書三昧というのも良いかもしれない。